

土木学会デザイン賞の 創設とこれまでの経過

¹ 福井 恒明・² 岡田 智秀

¹ 正会員 博士(工) 東京大学大学院講師 工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:fukui@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

² 正会員 博士(工) 日本大学専任講師 理工学部海洋建築工学科
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp)

2001年度に創設された土木学会デザイン賞は、土木のデザインに従事する個人を表彰対象とした日本で初めての授賞制度であり、2004年度までの4回の開催で50作品を授賞対象とし、234名53組織を表彰してきた。本稿では、まずデザイン賞創設の経緯の概要を整理し、第1回から5回目の開催に至るまでの募集体制や応募・選考の実情、推薦制度や選外作品へのコメント開示制度の導入などについて述べる。また、応募作品や授賞作品の変遷について、橋などを中心とした土木構造物単体のデザインから、市民参加や複合的事業が目立つようになってきたことなどを指摘する。最後に、デザイン賞が所期の目的に対して一定の成果を挙げている一方、応募数や応募範囲を拡大すること、デザイン賞受賞が技術者・デザイナーの業績として認められるよう各方面に働き掛けていくことが必要であることを述べる。

キーワード：デザイン賞、授賞制度

1. はじめに

土木学会デザイン賞(正式名称：土木学会景観・デザイン委員会デザイン賞、以下デザイン賞)は、土木のデザインに従事する個人を表彰対象とした日本で初めての授賞制度である。土木学会景観・デザイン委員会の下に設けられたデザイン賞選考小委員会が賞の運営にあたり、2001年から2004年度までの4回の開催で164作品の応募に対して50作品、234名、53組織を表彰してきた。筆者等はデザイン賞の創設・運営に事務局担当者として携わっており、本稿はその立場から、デザイン賞の創設経緯、募集・運営方法の変化や応募作品、授賞作品の変遷を整理し、デザイン賞開催の成果と今後の課題について述べるものである。

2. 土木学会デザイン賞創設の経緯

(1) 創設の経緯

1997年にデザイン賞の運営主体である土木学会景観・デザイン委員会が創設された(初代委員長：中村良夫)。設計者の顔が見えない日本の土木界において、技術者やデザイナーが実績を作ることができ、設計の質によっ

て競争を行う土壌づくりは同委員会の活動の柱の一つとなっていた。当初の活動はデザインワークショップの実施と、橋梁設計競技(コンペ)の実現に重点が置かれた。コンペは実施直前まで準備が進められたが発注者の理解が得られず中止となり(1999年)、同委員会の打った次の手が授賞制度の構築であった。2000年9月には景観・デザイン賞授賞制度準備小委員会(田村幸久座長)が立ち上げられ、他分野のデザインに関する表彰制度を参考にしながら賞の骨格に関する議論が進められ、翌2001年度に第1回の募集が行われた。当初は隔年開催の予定であったが、第1回の授賞式の際に翌年の開催が宣言され、以来毎年開催されて現在に至っている。

(2) デザイン賞の特徴

デザイン賞の主な特徴は以下の2点である。

a) 作品賞と個人賞の中間的位置づけであること

準備段階で最も議論となったのは、表彰対象を作品とするか、個人とするかの点にあった。景観・デザイン委員会の活動方針からは、技術者やデザイナー個人に光を当てることが賞に求められる必須条件であった。その一方で、「わが国の土木のシステムはすぐれて集団でものを作り上げるようにできており¹⁾」、特定の個人の功績を明らかにして表彰することは事実上不可能である。そ

ここで、「作品を選定し、作品の実現に貢献した個人を顕彰する」という形式となった。そのため発注者、設計会社といった一般的な意味での関係者とは別に、作品の実現に貢献した個人を「主な関係者」として挙げるのが求められている。

b) 作品竣工後2年以上の経過が応募要件であること

デザインに関する表彰制度は、最新の作品を対象とすることが一般的であるが、土木デザインに求められる要件の一つは、その作品が長い時間をかけて風景の一部となることだと言える。そこで、竣工後2年以上経過していることが応募の要件とされた。これまでの授賞作品を見る限り、時間とともに劣化するような作品は選ばれておらず、この要件が有効に機能していると考えられる。

3. 選考体制

(1) 選考小委員会の組織

土木の分野は橋梁、河川など様々に分かれているが、デザイン賞の対象はそれら全てである。そこで、景観全般、構造・橋梁、河川、都市、工業デザインの各分野からデザインに造詣の深い専門家に選考委員を依頼し、選

考小委員会を組織している(表-1)。また、景観やデザインに携わる大学研究者や民間技術者の若手からなる事務局が運営に当たっている。

(2) 選考方法

選考は、「規定審査」「応募書類及び写真映写による1次選考」「選考委員の代表による現地審査報告を受けての2次選考」という手順で行われている。

土木デザインの善し悪しを判断するには、周囲との関係性やスケール感なども重要な要素である。したがって全ての応募作品について現地審査を行うのが理想であるが、それは時間的にも財源的にも困難である。そこで、書類審査においてある程度以上のデザイン水準にあると判断されたり、書類審査だけではデザインの水準が判断できないとされた作品に対し、複数の選考委員が現地審査を行うことになっている。ただし、応募作品を現地審査対象と判断することは、作品に一定の評価を与えることではないと位置づけており、このため設計コンペのように「1次選考通過作品」として公表していない。

異分野の作品を同列に扱い、授賞対象作品を決定することは困難な作業である。これまで実施された4回の選考は「作品レビュー」「投票」「投票結果を元にした議論」

表-1 歴代選考委員と事務局幹事(文献2)～10)より作成)

年度	選考委員(所属/専門)	事務局幹事(所属)
2001	◎篠原 修(東京大学/景観全般) 大熊 孝(新潟大学/河川) 北村真一(山梨大学/都市・河川) 榊原和彦(大阪産業大学/都市デザイン) 佐々木葉(日本福祉大学/都市・橋梁) 杉山和雄(千葉大学/造形) 田村幸久(大日本コンサルタント/橋梁)	○齋藤 潮(東京工業大学) 浅野 清(清水建設) 上島顕司(国土技術政策総合研究所) 高楊裕幸(大日本コンサルタント) 福井恒明(東京大学) 水谷智充(千代田コンサルタント)
2002	◎杉山和雄(千葉大学/土木造形) 大熊 孝(新潟大学/河川) 加藤 源(日本都市総合研究所/都市デザイン) 齋藤 潮(東京工業大学/景観論) 澤木昌典(大阪大学/環境デザイン) 田村幸久(大日本コンサルタント/橋梁、道路)	○川崎雅史(京都大学) 久保田善明(石川島播磨重工) 鈴木 圭(鹿島建設) 平野勝也(東北大学) 福井恒明(東京大学) 水谷智充(千代田コンサルタント)
2003	◎杉山和雄(千葉大学/土木造形) 石川忠晴(東京工業大学/環境水理) 石橋忠良(東日本旅客鉄道/構造、施工) 加藤 源(日本都市総合研究所/都市デザイン) 川崎雅史(京都大学/景観デザイン) 齋藤 潮(東京工業大学/景観論) 内藤 廣(東京大学/建築デザイン・景観デザイン)	○平野勝也(東北大学) 岡田智秀(日本大学) 久保田善明(オリエンタルコンサルタンツ) 深堀清隆(埼玉大学) 福井恒明(東京大学) 藤田宗寛(清水建設) 山田圭二郎(セントラルコンサルタント)
2004	◎内藤 廣(東京大学/建築デザイン・景観デザイン) 石川忠晴(東京工業大学/環境水理) 石橋忠良(東日本旅客鉄道/構造、施工) 加藤 源(日本都市総合研究所/都市デザイン) 佐々木葉(早稲田大学/景観論・デザイン論) 樋口明彦(九州大学/景観デザイン・アーバンデザイン) 宮沢 功(GK設計/インダストリアルデザイン・景観デザイン)	○福井恒明(東京大学) 江本智一(長大) 岡田智秀(日本大学) 久保田善明(オリエンタルコンサルタンツ) 中村泰広(鹿島建設) 深堀清隆(埼玉大学) 星野裕司(熊本大学)
2005	◎内藤 廣(東京大学/建築デザイン・景観デザイン) 佐々木政雄(アトリエ74 建築都市計画研究所/都市計画・都市デザイン) 佐々木葉(早稲田大学/景観論・デザイン論) 島谷幸宏(九州大学/河川工学・河川環境) 樋口明彦(九州大学/景観デザイン・アーバンデザイン) 三浦健也(長大/橋梁デザイン・構造設計) 宮沢 功(GK設計/インダストリアルデザイン・景観デザイン)	○岡田智秀(日本大学) 江本智一(長大) 中村泰広(鹿島建設) 八馬 智(千葉大学) 福井恒明(東京大学) 星野裕司(熊本大学)

◎は選考委員長、○は事務局主査

という手順で行われてきた。その際に選考委員は専門分野にこだわらず広く議論と評価を行い、作品の技術的部分や専門的部分に関する評価は他の委員から求められて発言することが多い。その結果、専門的技術として優れた点と景観上優れた点を併せ持つ作品が授賞対象とされることが多いものと考えられる。

4. 作品の傾向

(1) 応募作品について

2004年度までの応募作品数とその内訳を表-2に示す。第1回から応募総数が減り続けており、賞の運営上重大な課題となっている。作品の種別について、初回は様々なものがあつたが、デザイン賞の性格が浸透してきたこともあり、最近では種別が固定化してきている。主な特徴は、橋梁・高架橋、街路の応募割合が低下していること、河川・水辺や駅・駅前広場は比較的一定の割合で応募があることなどである。応募者の幅は年を追って広がり、地方のコンサルタントや発注者（国土交通省の工事事務所等）からの応募も増えている。

(2) 授賞作品について

授賞作品についても応募作品の傾向と似通っているが、初期の授賞作品の主体が橋梁などの構造物単体のデザインであるのに対し、ここ1、2年で街路や水辺、公園など、様々な主体の調整の結果実現したデザインや、市民参加によるデザインに対する授賞が増えてきた。具

体例としては「豊田市児ノ口公園（2004 最優秀賞）」「源兵衛川暮らしの水辺（2004 最優秀賞）」「阿武隈川渡利地区水辺空間（2004 優秀賞）」「壺屋やちむん通り（2003 優秀賞）」などが挙げられる。

これらは土木デザインがこの数年で新たな局面に入ってきたことを端的に示していると思われる。美しい国づくり政策大綱（2003）、景観法公布（2004）はむしろこうした先進的な作品の実績の上にあるとも言えよう。

5. これまでに変更された点

(1) 「主な関係組織」の導入

表彰対象の個人である「主な関係者」について、第1回は応募者に厳密な選定を要請した。すなわち困難を承知しつつも個人を特定して「主な関係者」に記載することとした。その結果、個人名を出すことに発注者が難色を示し、応募を断念した例が複数あり、またデザイナー個人から「組織としての貢献もあるのではないか」といった意見もあった。そこで第2回（2002）の募集時には、ある組織が全体として作品の実現に貢献し、貢献した個人が特定できない時に限って、「主な関係者」に組織を挙げることを許容した。さらに第3回（2003）では「主な関係者」と別に「主な関係組織」欄を設けた。

こうした措置は「個人に光を当てる」という当初の目的からはやや後退した面があるが、「主な関係者」欄については毎年適切に記載されていると判断している。

表-2 応募作品数と内訳の推移（各年度のデザイン賞選考小委員会資料より作成）

年度	2001			2002			2003			2004		
応募総数	64			40			33			27		
入賞数（入賞率 ^{*1} ）	17 (27%)			13 (33%)			11 (33%)			9 (33%)		
最優秀賞	5			3			4			2		
優秀賞	12			10			6			7		
特別賞	-			-			1			0		
応募作品種別 ^{*2}	実数	%	うち入賞数	実数	%	うち入賞数	実数	%	うち入賞数	実数	%	うち入賞数
橋梁・高架橋	29	45%	8	16	40%	6	13	39%	6	7	26%	2
道路	5	8%	2	2	5%	1	2	6%	1	5	19%	2
トンネル	1	2%		1	3%		1	3%		1	4%	
河川・水辺	8	13%	2	6	15%	3	5	15%	2	5	19%	3
ダム	1	2%	1				1	3%		3	11%	
街路	9	14%	2	4	10%	1	2	6%	1	2	7%	
公園				1	3%		2	6%		2	7%	1
駅・駅前広場	6	9%	1	5	13%	2	5	15%	1	2	7%	1
開発	1	2%										
サイン	2	3%	1									
建築	1	2%										
ゴルフ場				1	3%		1	3%				
計画・制度	1	2%										
その他				4	10%		1	3%				
合計	64	100%	17	40	100%	13	33	100%	11	27	100%	9

*1 入賞率=入賞数÷応募数

*2 筆者の分類による

(2) 選外作品に対するコメント開示制度の創設

第3回(2003)の選考委員会発足時に、選外となった作品の関係者に対するフォローもデザイン水準向上のために重要であるとの議論がなされた。そこで、選外となった作品のうち、応募者から希望があったものについては、選考時の委員のコメントを開示することとなった。具体的には選考会の記録から、選外となった理由や評価できる点などを事務局が要約し、選考委員に確認した上で応募者に書面で通知している。

(3) 特別賞の創設

第2回(2002)に「日光宇都宮道路」が最優秀賞に選定された。同作品は道路景観の専門家の間ではすでに高い評価を得た古典的作品であったため、このような作品に対する表彰は、他の比較的新しい作品とは別の形で表彰すべきではなかったか、との議論が景観・デザイン委員会で行われた。これを受け、第3回(2003)の選考委員会発足時に、すでに社会的に高い評価が定まっている作品に対しては特別賞を授与することが確認された。

同年に応募された「太田川基町護岸」はこの条件に合致するものと判断され、特別賞に選定された。

(4) 作品推薦制度の創設

応募数増加のための手段として、第4回(2004)より推薦制度を設けた。これは、デザイン賞に相応しいと思われる作品の推薦を一般から募り、推薦のあった作品の関係者(主に発注者、管理者)に対して、景観・デザイン委員長名でデザイン賞への応募依頼書を送付するものである。ただし、推薦のあった作品は選考上優遇されることはない。選考委員には推薦の有無は開示されず、

他の作品と同様に扱われる。

この制度は文字通りに広く一般の方から作品を募る他薦の面もあるが、関係者が自ら関わった作品を自薦し、景観・デザイン委員会からの応募依頼書によって関係者等の応募意欲を喚起させ、賞への応募を促すという側面が大きい。

第4回(2004)は5件に対して応募依頼書を発行し、うち4件から応募があり、結果として全て入選している。

(5) 賞牌販売の開始

デザイン賞のイメージアップと運営財源確保を兼ねて、第3回(2003)より賞牌の販売を開始した。デザインは当時の選考委員長であった杉山和雄・千葉大学教授によるものである。賞牌には組織用(高さ22cm、写真-1)と個人用(高さ11cm)の2種類がある。

当初は授賞作品1作品につき1個の賞牌を進呈し、レプリカの購入を依頼する予定であったが、収支の都合により、受賞者のうち希望者に販売する形式となっている。

6. デザイン賞の成果と今後の課題

(1) デザイン賞の成果

a) 個人名を出すことの浸透

建築分野では建築家として作者個人の名が世に出ることはきわめて自然であるが、従来の土木作品では匿名性が重んじられてきた。こうした流れとは異なり、デザイン賞は土木作品の作者個人に光を当てることに趣旨となる。このため当初は懸念の声もあったが、これまでのところ個人名の明示に関して問題や事故は全く生じていない。このことをふまえると、土木作品に関わる個人名の明示は、デザイン賞を通じて、今後徐々に浸透していくと考えられる。

ただし、これまで表彰の対象となった「主な関係者」を振り返ると、土木の景観分野に深く精通した方々が多くみられ、それだけ個人名の明示に対してモチベーションが高かったと思われる。この先は個人名の明示に関して、広く社会全般に認知を促す取り組みが求められてこよう。

b) 関係者の自信

この点については、この1~2年の授賞式の雰囲気に見られているといえる。初期の頃は、授賞式だけでは間が持ちにくい雰囲気があったが、最近の授賞式では、「主な関係者」による作品のプレゼンテーションにおいて、それぞれが独自の趣向を凝らし、見事なパフォーマンスで会場を大いに沸かせるようになってきている。また、土木学会誌90周年記念特別号やその後の学会誌の企業広告にみられるように、「主な関係者」の所属企業が自

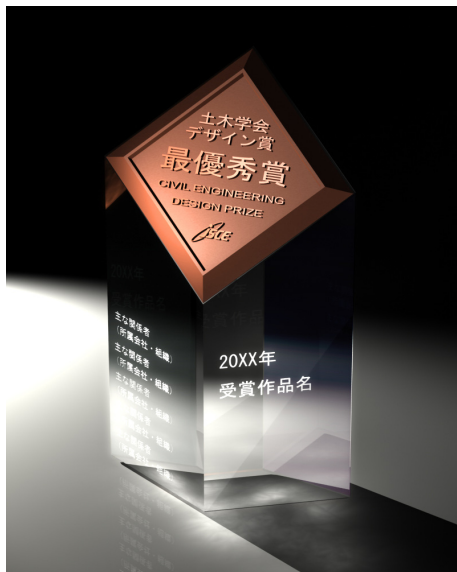


写真-1 賞牌(組織用・CGイメージ)

社広告の看板として受賞作品と受賞の事実を掲載するようになった。

これらの現象は、授賞者の自信の現れと解釈でき、わずか5年足らずであるが、一定の成果がみえはじめているといえよう。

(2) 今後の課題

a) 応募作品数の確保

前述の通り、応募作品数が年々減少しているが、授賞作品のクオリティ確保、可能な限りの現地審査の実施のためには数多くの応募作品が必要である。現在では造園や都市の分野へのアピールが比較的弱いため、広報活動を強化する予定である。また、賞そのものについても知名度を上げる必要がある。

b) 受賞が業績として認められること

デザイン賞創設の目的を省みれば、デザイン賞受賞が「主な関係者」の技術力・デザイン力の証として認められ、プロポザル等での評価基準に加えられるべきである。これは発注者に関わる問題であるが、景観・デザイン委員会として各方面に働き掛けていくべき重要な課題であると考えられる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、土木学会景観・デザイン委員会デザイン賞選考小委員会より、過去の応募作品・授賞作品に関する資料を使用することについてご快諾いただきました。ここに記して感謝します。

参考文献

- 1) 田村幸久：デザイン賞発足の検討経緯，土木学会誌，Vol.86/No.5，p.79，2001.5.
- 2) 中村良夫：第一線のエンジニア諸氏へーデザイン賞を創設します，土木学会誌，Vol.86/No.5，pp.78-80，2001.5.
- 3) 篠原修：土木のデザインー国土とエンジニアの荒廃を救うもの，土木学会誌，Vol.87/No.9，pp.58-60，2002.9.
- 4) 杉山和雄：一般ユーザーへのアピールの場としてのデザイン賞，土木学会誌，Vol.88/No.8，pp.89-92，2003.8.
- 5) 内藤廣：土木学会デザイン賞について，土木学会誌，Vol.89/No.8，pp.92-95，2004.8.
- 6) 内藤廣：転換期の土木デザインは何を志すのかー土木学会デザイン賞2005の募集にあたってー，土木学会誌，Vol.90/No.8，pp.71-74，2005.8.
- 7) 土木学会デザイン賞選考小委員会編：作品選集2001，土木学会，2002.1.
- 8) 土木学会デザイン賞選考小委員会編：作品選集2002，土木学会，2003.5.
- 9) 土木学会デザイン賞選考小委員会編：作品選集2003，土木学会，2004.5.
- 10) 土木学会デザイン賞選考小委員会編：作品選集2004，土木学会，2005.6.